



スベトラーナ・アレクシェービッチ(ウクライナ出身・1948-)は『チェルノブイリの祈り』等のインタビュー記録文学が高く評価されて、2015年ノーベル文学賞を受賞しました。彼女はホームページで、著作について、次のように書いています。

命、人生への私の関心は、事件とか、戦争とか、チェルノブイリとか、自殺などを追うことではありません。人間に何が起きているのか、私達の時代に人間に何が起きているかです。人はどのように行動し、反応するのかです。そのビジョンに最もふさわしいジャンルを捜してきました。私はあれこれ試しましたが、ついに人間の声がひとりで語るというジャンルを選んだのです。私は数千の声、運命、断片から私の本を作っています。1冊の本につき、500~700人の人々と面会し、会話を記録し、それぞれ3,4年かかりました。私の記録は数世代の人々を取り込んでいます。1917年の革命を目撃した人々の記憶で始まり、戦争とスターリンの強制収容所を通り、現在に至っています。これはソヴィエトとロシアの魂の物語なのです。

私は『チェルノブイリの祈り』の冒頭の、「消防士の妻リユドミーラ」の言葉に圧倒されました。致死量の4倍を被曝した夫は瀕死の状態、苦しみながら崩壊し続ける「放射性物質」になってしまった。けれども、リユドミーラには最愛の夫であり、その死の床の傍らで支え続け、愛し続けたのです。

第一章から三章まで、事故に遭遇した人々の声が合唱というタイトルで記されています。チェルノブイリとその近郊の住民、農民、頭脳労働者から工員、軍人、共産党委員、老人から妊婦、幼児を育てる母親、そして、幼い子供たちまで、自分たちに襲い掛かっている、見えない死神である被曝死を日々感じつつ、どのように生きているのかを、自らの言葉で証言しています。

最後の「事故処理作業員の妻フレンチナ」の言葉も胸を突きます。放射能の知識も、被曝の危険への対策もなく、作業現場で普段通りに作業させられた工員の夫が、しかも最愛の夫が、治療の甲斐もなく、怪物になって、死んでしまった。その喪失感からどう立ち上がればいいのかを訴えています。

ロシア人の感性、生活、信仰など、文化を肌で知らされるような思いになりました。彼らは熱く人を愛し、愛する情熱に熱中できる人々でした。信仰が生活と表裏一体となり、神や、死んだ祖先への敬愛が常に生活を支配しています。また、命を育んできた大地へ信頼は揺るがないものでした。小話やウオッカで、笑ってしのぐユーモア、たくましさがあります。けれども、帝政ロシア、ソヴィエトという政治体制の中で、「恐怖と偏見」を叩きこまれてきました。「無知と閉鎖性」が国民性だと述べている人もいます。命令に従って生きてきた人々だったということもよく分かりました。放射能の情報は隠され、操作され、事故が発生した時には、すでに役に立たないものになっていました。その中に無防備に放り出されたのが彼らです。戦争では、愛国心溢れるロシア人は、勝利のため男女ともに、一体となって戦った歴史がありました。戦争は恐怖でした。チェルノブイリ事故も恐怖で、ある意味で「戦争」ですが、敵は見えない、無味無臭の放射能です。どのように襲ってくるか、また、いつ、いつまで攻撃してくるのか分からないのです。大きな、不気味な恐怖の霧の中で、「孤独な人間の声」として、訴えています。彼らは「自由」を奪われていたのだと、感じました。

チェルノブイリ原発爆発事故は当時のソ連、現在のウクライナで1986年、ちょうど30年前に起きました。25年後に福島原発が爆発、メルトダウンし、放射性物質を拡散し続けています。日本の権力側の姿勢、方針は、チェルノブイリ事故時と変わりありません。私たちも霧の中に生きています。今まで、チェルノブイリの人々を「孤独な人間」として追いやっていましたが、もはや、原発事故は対岸の火事ではなくなり、私たちも声を出さなければなりません。

人間の生の声で、歴史の語り部となる「オーラルヒストリー」の領域があります。チェルノブイリの人々のように、命を懸けて愛を貫く人々のように、日本人は語れるだろうか、自信がありません。